

## 学級編成替えが児童の学級適応感に及ぼす影響に関する研究

専攻 学校教育学  
コース 学校心理学  
学籍番号 M08037F  
氏名 西村 淳

### 問題と目的

児童の学級への適応及び不適応を考えると、個人の要因だけではなく個人と環境との関係も重視されるべきという指摘がなされている。個人の環境適応に関する研究は多くあり、児童期の環境移行における環境適応に関する研究も多く見られる。しかし、学級編成替えを扱ったものは少ない。北田(1986)は学級編成替えを適応という観点から教育効果を高める上で最大の方策であると位置づけるとともにそれが検討されていないことを指摘していた。学級編成替えは学級編成員の再構成や担任教師の変更など児童にとって今まで慣れ親しんできた環境が一時的に崩壊するといえる。しかし、先行研究に見られるような進学や転校などに比べその変化は大きいとはいえない。

したがって、本研究は学級編成替えが行われた学級の児童が新たな環境へ適応していく過程を学級適応感及び学級雰囲気認知と調査時期及び友人関係とを関連づけながら検討していくことを主たる目的とした。

### 方法

調査対象者：T市内公立小学校6年生の83名(男子50名、女子33名)の児童が調査対象者として本研究に参加した。

要因計画：1要因を被験者内要因とする3(調査時期)×3(社会測定的地位水準)の2要因混合計画に基づいて分析はなされた。

手続き：調査は集団場面で実施された。各質問尺度からなる冊子が配布され、質問紙に回答することが求められた。

調査時期：平成21年3月中旬、4月下旬、5月下旬にそれぞれ同様の質問紙による調査が行われた。

質問紙：質問紙は、学級適応感尺度(渡邊,2006)、心理的距離地図(PDM)(古川ら,1983)、学級雰囲気尺度(根本,1983)の質問紙から調査票は構成されていた。

### 結果

尺度の分析にあたっては、前学年末(3月)調査時のIsss 平均値+1S.D.以上の得点を示したものをIsss 高水準群(以下H群)、平均値-1S.D.以下の得点を示したものをIsss 低水準群(以下L群)とし残りをIsss 中水準(以下M群)とされた。

Isss(田中,1979)は、PDMに表された友人を選択・被選択関係として、学級集団内の個人の社会的地位を求めたものである。

#### 学級適応感尺度について

本尺度の反応に基づき調査時期別・Isss水準別に平均得点とS.D.値を整理し、3(調査時期)×3(Issss水準)の1要因を被験者内要因とする2要因分散分析が行われた。その結果、下位尺度級友との関係にIsss水準の主効果が見られた。Tukey法による下位分析を行ったところ、L群よりもH群の方が有意に高得点を示すことがわかった( $F(2,72)=3.69, p<.05$ )。その他に有意な主効果及び交互作用は見られなかった。

#### 学級雰囲気尺度について

本尺度の反応に基づき調査時期別・Isss水準別に平均得点とS.D.値を整理し、3(調査時期)×3(Issss水準)の1要因を被験者内要因とする2要因分散分析が行われた。その結果、下位尺度の安心に有意な傾向差が見られ、3月より4月の得点が高い傾向が示された( $F(2,73)=2.59, p<.1$ )。また、「切迫」に調査時期の主効果が見られ、5月より3月の得点が高い傾向が示された( $F(2,73)=3.26, p<.05$ )。

### 考察

#### 学級適応感と友人関係

まず、児童の社会的地位が学級適応感に与える影響について考察する。学級適応感尺度の各下位尺度を調査時期・Isss水準ごとに分析した結果、「級友との関係」においてH群がL群よりも優位に得点が高かった。Isss得点は、児童の被選択数及び相互選択数によって得点が上昇する。級友からの被選択及び相互選択数の

多い児童が級友との関係において肯定的な感情を持つことは当然である。その他の下位尺度において、Isss 水準による主効果は見られなかった。教師との関係はもとより集団ないでの活動や学習においては、個々の友人との関係が影響していないことが明らかになった。浅川ら(1992)は AP の存在が海外帰国子女にとって、新しい環境へ適応する際に重要な要因になることを明らかにしているが、学級編成替えにおいてはそこまでの危機的な状況ではないことが明らかになった。

#### 学級適応感と学級編成替え

調査時期の主効果及び調査時期・Isss 水準における交互作用は見られなかった。北田(1986)は「教師への態度」において編成替えの有無、適応感水準、調査時期の要因に主効果が見られたと報告している。しかし、本研究には同様の結果が見られなかった。北田(1986)は適応感水準において、同一の尺度を用いて独立変数及び従属変数としていた。これは、研究者がその変化を観察したいとする変数を研究者自身が操作することになり、分析方法には疑問が生じた。

担任教師は、学級編成替えにより担任や学級構成員の変更を行う。担任教師は、児童が新たな環境へ移行することにより、児童の環境適応再構築をねらっている。言い換えれば、新しい学級にすることで仕切り直しをねらっていると言える。しかしながら、本調査の結果からは、児童の学級適応感において時期的変動が見られなかったことから、児童にとって学級編成替えは危機的な環境移行と認知されていないことが明らかになった。その原因として、学級編成替えは進学や転学と比べると環境の変化は小さいこと、また、調査対象小学校は毎年学級編成替えを行っており、このような環境移行には既に順応できるようになっていることが考えられた。

#### 学級雰囲気と学級編成替え

学級雰囲気認知においては、「安心」及び「切迫」の下位尺度で時期的変動が見られた。「安心」に関しては、3月と4月の間に有意差の傾向が認められた。しかし、3月と4月の間のみにはしか差が見られなかったこと、そして学級適応感のどの因子にも時期的変動が見られなかったことから、一時的なものであると考えられた。期待について伊藤(2007)は、「これから起きると予測できる出来事に先行して生じる観測可能な行動を指す。」としていた。しかしながら今回の調査では、

新たな環境に移行したばかりでどのような学級になるか不透明な時期にもかかわらず好意的な認知がされていたことより、児童が自らの所属する学級がそのようであって欲しいという希望が表出した結果と考えることが妥当である。また、東(1981)は、どこに注意を向け、どのように情報を取捨するかを決める枠組みを知覚の図式とし、期待は知覚の図式の重要な構成要素としている。そして、知覚のみならずすべての行動は、その図式のもとに生ずるとし、思考や問題解決の難易に著しい影響を及ぼすとしている。したがって、児童は、新たな学級に移行したとき、その学級が自分にとって安心できる場所であるかどうかということに強い関心を持つと考えられる。個々の友人または担任教師に対するものよりその総体としての学級の雰囲気は児童の関心が向いているということは、興味深いことである。

「切迫」に関しては、3月よりも5月の得点が有意に低かった。これは、5年生3月時点より6年生5月時点の方が明らかに「いそがしく」「せわしない」と認知しているためであった。調査対象小学校の6年生の5月は、委員会活動が活動を開始する時期で、特に6年生はその運営や実行の中心的な立場となった。また、大きな学校行事を控え、その準備も始まっていたため、休憩時間など以前であれば自由な時間がそれらの時間に費やされるようになったことが、大きな要因と考えられた。したがって、「切迫」に関しては、学級編成替えというよりも進級によるものと考えられた。

以上より、6年生においては、学級編成替えという環境移行が学級適応感に及ぼす影響は見られなかった。しかし、調査対象小学校が、毎年全学年で学級編成替えを行っていることと学級数が3学級であることから、6年生までに同じ学級に属したことがある児童も多いと推測されること、学校内で行われる様々な活動で児童が少なからず既知の状態にあったことも変動の少ない理由と考えられた。学級編成替えが隔年で行われている場合や学校の規模によってどのような影響があるかは、今後の検討課題であった。

主任指導教員 浅川 潔司  
指導教員 浅川 潔司